

平成 30 年 6 月 25 日

「中野区新図書館及び地域開放型学校図書館等運営計画」学識経験者による  
検討委員会 第 1 回 議事テープ起こし

○開催概要

日時	平成 30 年 6 月 25 日（月） 15 時 10 分～17 時 00 分	
場所	中野区産業振興センター	
出席者	氏名	所属
	大串 夏身	昭和女子大学名誉教授
	宇陀 則彦	筑波大学 図書館情報メディア系 准教授
	伊東 知秀	中野区地域支えあい推進室 中部すこやか福祉センター 副参事（地域ケア担当）
	小野 秀晃	中野区教育委員会事務局 子ども教育経営分野 図書館運用支援 担当係長
	加藤 慎一	株式会社ヴィアックス
	永田 治樹	株式会社未来の図書館研究所 株式会社ヴィアックス 顧問
	今泉 裕美子	株式会社ツクリエ
	太田 尚緒美	株式会社ツクリエ
	梶川 悦子	株式会社ヴィアックス
	牧野 雄二	株式会社未来の図書館研究所 株式会社ヴィアックス
	廣瀬 幸子	中野区立中央図書館 館長
	佐伯 充久	株式会社ヴィアックス
	笠原 未来	株式会社ヴィアックス

○議事テープ起こし

発言者	内容
	1. はじめに (1) 開会 (2) 検討委員会の進め方の提案 (3) 座長の選任
加藤	未来創造プロジェクト統括責任者の加藤と申します。 第 1 回ですので、検討委員会の進め方等について、ご提案させていただきます。 検討委員会は、全 4 回行う予定であります。第 1 回目が本日、第 2 回目が 7 月

	<p>の中旬、第3回目が8月下旬、第4回目が9月上旬です。検討委員会では、私ども共同事業体の方で提出させていただいております提案書の内容、及びそれに基づき種々調査した結果等を、学識経験者の方にご検討していただくということになります。最終的には、ここでの検討結果を反映させた報告書を中野区に提出することになります。</p> <p>検討委員会を進めて行くにあたり、まずは座長の選任をしたいと考えております。共同事業体といたしましては、豊富な経験をお持ちの大串先生にお願いしたいと思っております。よろしいでしょうか。</p> <p>本日は学識経験者を3名お越しいただく予定ではございましたが、学校図書館を専門とする河西先生ですが、ご事情で本日ご欠席となっております。ただ、本日はビジネス支援を議題として検討していきたいと思っておりますので、本日の検討委員会の内容は河西先生にも共有させていただいて、2回目以降に繋げていきたいと考えております。それでは座長の方から進めていただきたいと思います。</p>
大串	<p>座長を仰せつかりました大串でございます。よろしくお願いいたします。</p> <p>文部省の教育委員会のメンバーとして地域電子図書館構想である「2005年の図書館像－地域電子図書館の実現に向けて」(2000年)を取りまとめた後に、これからはコンピューター情報通信ネットワークが到来するという事で、「地域の情報ハブとしての図書館－課題解決型の図書館を目指して」(2003年)を取りまとめました。これも含めて三つの研究会が行った調査等を参考にして取りまとめたものが2006年の「これからの図書館像」です。「情報ハブとしての図書館」では地域の課題の一つとしてビジネス支援と起業を取り上げました。そこで図書館の役割は、起業というターゲットを定めるにしても、いわゆる「これから何かをやろう」という方のみではなくて、もっと幅広く地域社会の中を考えて、それから学生や家庭の主婦も含めて、そういったことに関心がある方の関心を高め、図書館の資源を使って考えていただき、それぞれの所で取り組んでいただく。いろんな形態での取組みというものがありますから、具体的にどうすべきかという相談を図書館にして枠組みを考えていただく、さらに具体的なところは行政や地域の経済団体に行って補助金の話など中身を詰めていただく、このようなことが重要であるという報告書をまとめて、ご理解をいただきました。</p> <p>紀伊國屋書店さんで図書館のビデオ「課題解決型サービス」(図書館の達人司書実務編3, 2009年)を作った時に、栃木県小山市立図書館の農業支援の取組みを取り上げました。実際に小山の農業支援を活用して農業を始めた方にインタビューをさせていただいた。そのインタビューの中で「図書館がこういうことをやるとは思っていなかった。小山は図書館の中で農業の具体的な講座をつく</p>

	<p>り、人の輪を作って実際に農業団体の相談員に来ていただき、相談をしてもらっていた。そして具体的にこういうふうにしよと決まってから行政に話し合に行く、それがとても良かった。」と仰っていた。いきなり個人がこういうことをやろうと行政の窓口に行くとハードルが高いが図書館でそういうことをして、いろんな人の関係を創りながら取り組めたのがとても良かったようでスムーズに行けた、と。グループが協力し合いながら助け合いながらやって行き、図書館においては朝市なども取組み、図書館の利用者も増えた。</p> <p>日本の図書館の中で1番住民1人当たりの貸出冊数が多く、30何冊という所がありました。それは町村合併前のことで岐阜県のある小さな村なのですが、何故そんなに沢山利用者が来るのか。実は図書館を創るつもりではなくて博物館を作る予定だったが、モノがないということで図書館を作ったが、冊数は5万冊。ですが村役場の隣に作り、その駐車場で朝市をやった。そこにゾロゾロ人が来てみんな図書館に寄って行った。住民1人でいうと37冊借りられていった。近くに大学があり欧米から来た学生が図書館でボランティアをやりたいとやってきた。何十人という人が関わってきた。</p> <p>なぜ図書館が起業支援、ビジネス支援をやるのかと聞かれたときには、幅広く住民の方の生活や仕事に即して、いろんな要求を受け止められるのが図書館であるからだといえる。その中で具体的に起業を興していただける人が生まれて行く、こういうストーリーなのですね。</p> <p>伊万里の風力発電の特許を取られた方がいますけど、伊万里の図書館を使ってそれを実現された。東日本大震災の後に風力発電が急に話題となって、物凄い勢いでいろんな企業から相談が舞い込んで忙しくなったという話を聞きました。図書館がいろんな可能性を持っているということを共有し、共通の認識にさせていただき、これからも取り組んでいただきたいと思います。</p> <p>それでは、報告事項はヴィアックスさんの方からどうぞ。よろしくお願ひします。</p>
<p>牧野</p>	<p>未来創造プロジェクト、未来の図書館研究所の牧野と申します。</p> <p>新図書館及び地域開放型学校図書館等運営計画検討業務の履行計画について、第1回目ということで簡単に説明させていただきます。</p> <p>(※資料：中野区「新図書館及び地域開放型学校図書館運営計画検討業務」履行計画について)</p> <p>期間としては、平成30年5月から業務を開始しており、9月末までの期間に履行することとなっています。</p> <p>この業務の実施方針といたしましては、中野区の人々のワークとライフを支援し、地域のウェルビーイングを確保するという視点に立ち、社会の変化をとらえた新図書館及び地域開放型学校図書館等の運営計画案を検討します。</p>

	<p>中野区が示した基本的コンセプトや、本業務の仕様書等に基づきまして、ビジネス支援及び子育て支援の充実を図り、コミュニティにおける人々の協働、社会的学習の促進を行うものとします。継続的な学びの場を提供していくため、様々な設備活用、複合施設内の併設サービスとの連携や、交流や体験といったプログラム実施等のコトなど、積極的に人々が共に学ぶための仕掛けが必要であると考え、計画案検討を行ってまいります。</p> <p>具体的な検討事項といたしましては、中野坂上に新設予定の新図書館運営計画案の検討、これから開設されていきます地域開放型学校図書館の運営計画案の検討、さらに学校図書館運営計画案の検討、図書館システムに関するものも入ってきますけれど、この三つの計画案を検討してまいります。</p> <p>検討にあたって、地域に必要とされる図書館の運営計画とするべく、この学識経験者の検討委員会や、このあとご報告する各種調査、先行事例調査、住民意向調査などの取組みを通じて検討を行ってまいります。</p> <p>そして7月に中間報告の提出、9月に全ての計画案の提出を成果品として予定しております。</p>
<p>2.1 報告事項 (2) 検討業務の進捗状況 (ビジネス支援サービス関連)</p> <p>①先行事例調査の状況報告</p> <p>【5/29 実施】えんぱーく (長野県塩尻市)</p> <p>【5/30 実施】アンフォーレ (愛知県安城市)</p>	
大串	その次の (2) について説明をお願いします。
牧野	<p>検討業務の進捗状況ですが、特に今回ビジネス支援関連を、検討事項に対応するものとしてご報告したいと考えております。</p> <p>まず、先行事例調査についてご報告します。5月29日に長野県塩尻市にあります塩尻市立図書館が入っております「えんぱーく」という複合施設を視察するなど、先行事例調査を実施しましたので、ご報告したいと思います。ツクリエの太田さん、ご報告をお願いいたします。</p>
太田	<p>改めまして、ビジネス支援分野の運営担当をしておりますツクリエの太田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>「えんぱーく」についてご報告したいと思います。</p> <p>クリップでまとまっているものの2ページ目のものになりますが、ビジネス支援という観点でおまとめした書類になっております。こちら見て頂きますと、上に参考程度ですが写真が載っていますが、下にどのような機能がこちらの図書館にあったか、もしくはなかったか、そしてその下にビジネス支援について図書館直営ではなく、どこか別の第三機関等が運営している場合はそちらの情報を記載しております。その他には補足事項をまとめています。</p> <p>上から順番に行かせていただきます。コワーキング機能といって巷にコワーキ</p>

ングスペースというものが民間の運営でよくあると思うのですが、図書館の方で持ち込んだ資料の閲覧ですとかパソコンの作業が自由にできる環境であるかといったような観点でチェックをさせていただいたところ、こちらの塩尻図書館の方では、個人的な、場所に囚われないような仕事をされている方にとって、作業しやすい環境が十分にあると見学させていただきました。飲食についても図書館のフロアの中では基本的には禁止ということで、自由に飲んだり食べたりしながら書籍を見ることが出来ないのですが、エリアから少し出た別のフロアやベンチでしたら基本的に OK ということで、施設全体としてこういった資料を見ながらくつろげる空間作りをされている、ということでした。その下がビジネス支援メニューとなっているのですが、ファシリティー部分ではなくて例えばビジネスに関する相談ができる場所ですとか、企業と企業をつなぐマッチング、経営者同士のつながりを作ってあげるネットワーキング、知識を入れるセミナー、こういった動的な支援がこちらの図書館にあるかどうかといった観点でチェックさせていただきました。「えんぱーく」については「長野県よろず支援拠点」という国がやられているビジネス支援の団体と共同でビジネス支援を行っているということで、図書館についてはビジネス支援関連の本を沢山置いたブースを用意していますが、動的な支援についてはそちらの拠点でやられていて、切り分けをしているようでした。

Web サイトは当然のように「えんぱーく」にもありまして、SNS による情報発信については Facebook だけあるような状況でした。あとは別口で学生ボランティアによる LINE@ の活用も見られるようでした。

今申し上げた「長野県よろず支援拠点」という所が動的なビジネス支援分野をやられていまして、こちらは経済産業省の委託事業でして平成 26 年度から始められていまして、運営自体は「長野県中小企業振興センター」という所がやられているようです。平成 26 年度から大小合わせて 1, 853 件の相談があったということです。こちらのホームページの方にいろいろ事例が載っているのですが、小さいものから大きいものまで、レトルトカレーのパッケージを冊子にしたいといったお悩みですとか、木材屋の在庫削減とかスケジュールを見える化をしたい、というような相談から乗られているということです。

その他図書館として行っているビジネス支援として補足事項なのですが、NDC に囚われないジャンル別の配架ということを行っておりまして、絵本の側に子育て支援の本を置くのと一緒に、ビジネス支援のコーナーでは独自のジャンル分けをし、独自の番号を付与する形で配架されていました。

あと、「しおり部」といった学生ボランティアの図書館広報隊というようなものを今年度より始めているということで、基本的に学生主導でいろんな活動を行っているということでした。若いうちから図書館に関わっていただけるような

取組み、仕掛けづくりをされているとのことでした。

直接ビジネス支援と関係があるということではないのですが、日々のカウンターでスタッフさんが利用者さんとの会話を積み重ねることによって、結構面白い相談がカウンターに寄せられるということでした。ただ、これには一定のレギュレーションが必要なので、徹底していると仰っていました。

安城市の「アンフォーレ」という複合施設でも先行事例調査をして参りました。こちらの安城市では先ほどの「えんぱーく」同様に当たり前のようにコワーキング機能というのがあるのですが、特に注目したかったのが飲食についてで、図書館のフロア内でも基本的に飲食できるようにしているとのこと、きまりを決めきらないといったところがかなり斬新だなと思いました。あまりにも臭いがきつい物があつた際は、脇にどいていただくとか、そのぐらいの自治です。図書館の管理の基で運営をしているということでした。

ビジネス支援ということで、動的な部分は、「えんぱーく」は国の委託事業の方たちが行なっているのですが、安城市に関しては安城市の商工課の方たちのサテライトが図書館内にありまして、そちらの「安城ビジネスコンシェルジュ」が動的な支援を行っているという切り分けでやられておりました。

その安城市のブースの中にデータベースが15種類あるということでした。こちらでも Web サイトは当たり前のようにありまして、SNS については図書館は Twitter を運用されていて、「安城ビジネスコンシェルジュ」は独自で Facebook や Instagram を運用されているとのことでした。

「安城ビジネスコンシェルジュ」を ABC というそうなのですが、ABC は商工課のサテライトということで、図書館のフロアに3名で待機していらっしゃいます。1年間で200件以上の相談を受けておられるということでした。

略称である ABC にかけて ABC の三つのステップで経営力をアップしていこう、と謳っておりまして、日々様々な相談を受けていると仰っていました。

富士市の産業支援センターの f-Biz、岡崎市と岡崎商工会議所が開設した Oka-Biz よりも図書館の資料やレファレンスを活用したビジネス支援サービスをも目指されているということでした。15種類のデータベースがあり、「えんぱーく」と同様、NDC に囚われないジャンル別の配架を積極的に行われていました。ビジネス支援と直接的には関係ないのですが、ティーンズ向けの本のジャンル分けが豊富で、そのコーナーに関するパンフレットも別出しとして作られていて、かなり力を入れているなと思いました。図書館側のビジネス支援に関する考え方としては、安城市が立ち上がって間もないため、ABC との連携がもっとしていけると感じていらっしゃるようで、既に経営を始めていらっしゃる方の相談ももちろんなのですが、これから立ち上げるとか、フリーランスのスマールビジネスに主眼を置いたビジネス支援をして行きたいと仰っていました。以上

が「えんぱーく」と安城市それぞれの報告となります。

続けて分析シートについて、調査先が今の二つの図書館なのですが、二つの図書館に共通しているのがNDCに囚われないジャンル分けです。利用者の利便性、利用者ファーストを重視した配架をしていて回りやすい工夫をされていることでした。あと、どの図書館においても様々な機能をもった複合施設であり、図書館単体ではなく、いろんな方たちが関わって運用している施設であるというところでした。メリットは、例えば催事部分で、図書館以外の方々が運営をしているのですが、その方々が行うイベントによって子育て支援世代が集まってきて、その流れで図書館にも利用者が流れるといった流動するような効果が出ているというお話をどちらもされていました。

子育て世代とか中高生とか今まであまり図書館を利用して来なかった層の取組みに比較的效果を発揮するようです。

図書館内で対処しきれないこと、物販ですとか展示、企業の研修については図書館以外の有料会議室に促すとか、そういった施設全体で利用者をサポートできる仕組みになっているということです。

デメリットとしては、セクション毎に運営が異なるので、うまく連携がとれないこともあり、特にビジネス支援においては専門家に全て一任すると図書館側でも把握が難しくなってしまう、逆に図書館スタッフだけで相談を受けようとすると専門性が高すぎて運用が難しくなる、そういったバランスをとるのが難しいことが分かりました。

これらのことのまとめですが、図書館があらゆる情報の集積地となることの重要性、そして利用者を適切な場所、もしくはサービスに送客できるようなことの重要性、これは提案書では出口支援といういい方をさせていただいております。最後が、図書館ならではのサービスを充実させることの重要性、例えばですが参考文献を用いたビジネス相談をアンフォーレのABCではなるべく文献を使いながら積極的に相談の窓口となっている事例がありました。あとは書籍を軸にしたイベント、それから図書館としてあらゆる情報を網羅して且つそれを把握して活用できる相談員といった人材を配置して行くことが大事なと調査を通して思いました。

以上になります。

2.1 報告事項 (2) 検討業務の進捗状況 (ビジネス支援サービス関連)

②住民意向調査の状況報告【6/16実施】テーマ「ビジネス支援」グループインタビュー

大串	住民意向調査の報告をお願いします。
牧野	続けてグループインタビューの報告を太田さんをお願いします。
太田	6月16日土曜日に実施しました、ビジネス支援に関して中野在勤の皆さまに行ったグループインタビューのまとめについてご報告させていただきます。

添付資料の方では、当日 8 名の方に参加していただいた、それぞれの皆さまがモデレーターの質問事項に対して応えたものが大体始まりから終わりまで通して網羅されて記載しています。これを全て紹介していると時間がかかってしまうので、細かなご紹介は割愛させていただいて、それを踏まえて分析した「分析シート」が最後にありますので、説明させていただきます。

概要は 16 日に行なったということで、参加者は中野区在住、在勤の 8 名の方でした。参加者からの意見ですが、現在の図書館の利用状況というところで、皆さん頻度は高くないものの必要に応じてたまに利用する方が多かったです。利用目的については、資料の閲覧、趣味の本を探す、専門書のバックナンバーを求めて、子どもを連れて等それぞれの生活スタイルに合わせて様々でした。

二つ目、「場」という立場を考え方というところですが、対話されている中で人に会える場所や作業できる場所が欲しい、というような場という発言が皆さまから多かったです。ビジネス支援においては、情報、人が集まる空間を求める声が多かったです。またブックカフェのような飲食可能で居心地の良い空間、スキルアップに繋がるセミナーの開催、若年層シニア向きの終就職支援の必要性が意見として出ました。

3 番目は、場と併せて相談できる人も必要なのではないかという考え方も皆さんから自然と出てきました。ビジネス支援において何をそもそも聞いたら良いか分からない人へのアプローチ方法について、固定の曜日、時間、テーマを設け、利用者の貸出履歴から傾向を読み取って相談に乗る仕組み等があると良いのではないかといった意見が出ました。そういった相談ができる人が居ることのメリットとしては、自分で調べるより迅速な解決に繋がり、あとは図書館ならば適切な場所に導いてくれるのではないかというような意見が挙げられました。

図書館でビジネス支援を行うことについて、いろんな方に知ってもらうにはどうしたら良いかといった投げかけには、インタビュー参加者それぞれから様々な意見が出ました。「そもそも論で施設面に図書館を入れないことで、図書館が持つ固定概念を払拭できるのではないか」、「その図書館ならではの特色を打ち出していくこと。それが地域性に繋がるのでしょうか」といった意見ですとか、コワーキングスペースに集まった人達に対して実証実験を可能にする「こんなプロダクトを創った」というのに対して図書館に集まる人に対して協力してもらうことが可能だと良いのではないかなという意見ですとか、あとは若年層への早期キャリア意識の醸成、開催しているセミナーを間近に感じながら見ながらの作業が可能だと良いのではないかな、といった意見ですとか、図書館側から積極的にメールマガジン等の情報発信があると良いのではないかなという意見が挙げられました。

5 番目、図書館でビジネス支援を行う意義に関しては、区内でビジネスをする事業所や起業を検討しているような人にとっては、情報を取得することと交流が可能なコワーキングスペースが非常に重要であるという点です。図書館という公的な施設でビジネス支援を受けているということ、そのものが企業としての信頼感を得ることができるのではないかといった意見が挙げられました。

最後に、新図書館の建設に対してですとか、ビジネス支援はどうあって欲しいかについて自由に意見を求めたものが6番の「最後に」といったものになります。紙の本を手にする機会が減った今だからこその図書館のあり方、副業を始めとする今の自分にできることを観点に働き方のきっかけ作りをしていくこと、図書館からの積極的な情報発信、情報・人・それらを繋げる機能（相談できる人）が揃った場の必要性、被験者それぞれが利用者の視点で自由に意見を述べていただきました。

これらの1~8までの意見を聞き、私の方でもまとめたのですが、まず一つ目が今回の被験者たちは本当にたまたまであったのですが、求める資料の探し方ですとか、資料の活用の仕方に関するリテラシーが比較的高い方たちが多かったです。ただ、新図書館におけるビジネス支援のターゲットというのは、そういった方たちも勿論ですが、若年層、子育て中の主婦、シニア層、現在進行形でビジネスに関わる人だけではないと思いますので、何を相談したら良いかわからない人を基準に、誰でも気軽に利用できる施設・サービスを提供するためのアプローチをよく検討する必要があると思いました。

二番目は、豊富なデータベースやアーカイブ等、図書館ならではの蔵書を活かして情報・人、それらを繋げる機能（相談員）が一つの空間に集約されることが図書館におけるビジネス支援で一番大事なことではないかと思いました。

三番目は、参加者の利用状況から分かるように、それぞれが思う図書館ができることの幅というのはまだまだ狭い。短時間で新しいことを、といわれてもなかなか出ない状況なのですが、インタビューの中では企画書作成のために資料を求めにきたり、子連れで絵本コーナーを訪れ時間を潰すというような利用状況が挙げられました。例えば、NDCに囚われない横断的な資料の配架、「えんぱーく」、「アンフォーレ」でされているようなことをすることによって、仕事のために資料探しをしに来た人とか子どもをあやすために絵本を借りに来た人が、自分自身が興味をもてる趣味の本とかを、思いも知らないフロアで手に取るきっかけを得ることができるかもしれない。こういうような直接的なビジネス支援だけではなく、間接的に利用者個人の生活を豊かにすることができるようなきっかけを与えられる場所である必要があるのではないかとインタビューを通して思いました。

長くなりましたが、報告事項は以上となります。

大串	ご報告いただいたことについてご質問があれば、どうぞ。自由に意見をいっていただいて。
宇陀	<p>目的というか、中野区が一体どの方向に向かうのか、というのがこの会議で必要になっているのですが、いろんな所がいろんなことをやっているので基本には、中野区だけの枠組みとした新しいことではなくて、むしろディテールをちゃんと考えていくことだと思います。資料を揃えるといっても何を揃えるのか。あるいは意外と図書館の中で資料を探すっていうのは、難しい。資料を調べられているようで調べられないこともありますので、資料への誘導の部分はどうするのか。資料の種類に専門的なもの、初歩的なものがある中で、どうやって構造化していくのか。空間造りもそうで、単に居心地良い空間があって「どうぞ」というだけでは全然ダメであって、そのディテールの部分を中野区がどうしてやってモノにしていくか、が重要であると思います。</p> <p>それから、ヴィアックスさんが作ったところで、ブランディングみたいな話があるのですが、ブランディングをキャラクター作りみたいなふうに書いているけど、ブランディングとはキャラクターを作るというところの話ではなくて、その図書館ならではのアイデンティティに関わる、「これだったら中野区」であるとか、逆に「中野区だったらこれだよ」というような特徴づけみたいなもの、あるいは強みといったモノをやすのがブランディングであって、犬のキャラクターを作り出すのが決してブランディングではないと思います。日本語としてブランディングっていうのはチャンネルとかデザイナーなどのプランニングのイメージが強いのですが、ブランディングというのは決してそういうことではない。中野区の図書館のある種の機能やサービスというか、そこでのブランディングを狙うというところでないかと思います。</p> <p>資料を見るとビジネス支援のコンセプトは、実は企画提案書でいっているビジネス支援とは普通にイメージするビジネス支援よりも相当広く捉えているというように見受けられました。ビジネスというと本当に起業するとか思うのですが、これはもっと広く働き方のあり方であるとか、生き方の選択肢の一つということなので、非常に広く捉えていることが特徴だな、と思います。だからビジネスという言葉も「ビジネス、ビジネス」いわずに生き方みたいな方向でいくと良いのではないかという印象をもちました。その辺、狙いがあるのではないのでしょうか。</p> <p>まとめると、新しいことが考えるというのができることがもちろん良いのですが、一つひとつのディテールをちゃんと固めることが重要だということでしょう。</p> <p>もう一つは、ビジネス支援のコンセプトがかなり他と違うと思うので、ここをむしろ中野区の特徴として捉えるのではないかという2点です。</p>

大串	<p>僕としては、このお話をお伺いして、事例として取り上げた図書は大きな図書館ですね。多分今度中野に創られる図書館はこんな大きくないので、もう少し小さな図書館でビジネス支援をおやりになっている熊本市立くまもと森都心プラザ図書館は、地方創生のレファレンス大賞を二つ取っている。それから昔やっていたのは、品川区立大崎図書館は小さな図書館です。あとは、静岡市立御幸町図書館、駅から700mの所にある。そこも小さな図書館で、上に産業関係の局があるということで、ビジネス支援をやっている。そういう小さな図書館も必要なんじゃないかなと思います。</p> <p>本の並べ方の問題なのですが、NDCはそもそも無理がある。もとになった十進分類法が1870年代ですから。戦後の1920年代に日本で翻訳・修正したのがNDCで、それを今使っているということですから。例えば今の教科書にはNDCに全然合わないことが書いてあります。産業関係になると、農業が非常に盛んであった時だから、6類の農業が大きな割合を占めていて、商業は片隅にある。若い人達が図書館に来てすぐに理解することは難しい。例えば、収集からそういう枠組みを外しているところもある。大阪市立中央図書館はテーマ別で集めている。ある意味でそれぞれの図書館が工夫されて住民の方々の意識に合わせた、それから扱うテーマに合わせた形で本棚の並べ方を変えて行く。それを可動的に運用していくというのは意味のある取組みと思います。</p>
宇陀	<p>NDCに囚われない、というのはある種当然としても、NDCに囚われないというだけでは図書館とはいえず、図書館が図書館であるためには、コレクションであるところが重要。その資料の繋がりと申しましょうか、ビジネスの本の向こう側にはさらにいろんな知識、資料に繋げていかなくてはいけないわけで、その繋がりが見えるような見せ方というのも図書館ならではのじゃないかなと思う。また紙の本だけでやるのは当然難しく、紙の本とスマホのアプリとを連動するような形で、資料の誘導をするということがあっても良いと思います。そんなアプリ開発する予算があるのか分からない中、いっていますけども。やっぱりスマホは情報の自分の分身みたいな形で皆思っていますので、これを持った形で電子的な空間と紙の中の空間、両方でコレクションの世界に誘うことができることが必要なのではないかなと思う。</p> <p>図書館の配架って、僕いつも思うのですが、平面的に終わっている。立体的に見せる区分があっても良いのではないかと。私が最近やろうとしていることの一つとして、ドキュメント展示というものがあります。展示の視点でドキュメントを見せる。博物館や美術館みたいに、そのものをアピールするような形で図書館の資料も見せて行くようなことが出来ないかと最近思っていました。それを電子的にやるっていうのもそうですし、紙でちゃんとメンテナンスすることも出来ますし、コレクションの動きもできるのではないかなと思います。</p>

	す。
大串	<p>その辺りで何か聞きたいことはありますか。</p> <p>例えば住民の方に図書館でビジネス支援をやっている、ということを理解していただくというお話があったのですが、中野区さんでは調べたことがあるのでしょうか。</p> <p>例えば図書館の来館者の方が、どこから情報を入手しているか。台東区の来館者調査があって、HPが52.9%、区の公式のHPが8.6%をあわせると大体60%の人がHPから情報を入手している。それから「広報たいとう」は20%で、かなりのところがHPと「広報たいとう」で情報を入手している。ただ、台東区の図書館のHPはえらく見にくくて、その点はどうですかね。</p>
宇陀	<p>ターゲットによりますけど、今もう皆HPなんか見ているのかなという気がしていて。今の人達って忙しなくて、すぐに答えを求めたがる。すぐに求めたがるというところに応えるのが良いのか、それとも待てと。短絡的に検索欄にキーワードを入れてパッと見せるということに対して、図書館というのはそうではない、ビジネスの世界とは違って、価値観は多様なのだから、もっといろいろなことを見せるのが良いのだよ、という方向に行くのが正しいのかなと思います。ビジネスとしてスピーディーさを売りにするのか、それとも広がり深みを売りにしていくのか、両立するのか、そういうところが異なる軸かなとも思いました。その点このビジネス支援を中野区は広く捉えているところから見ると、そんなに、このボタンを押したら自動販売機のようにバンって出るモノではないんじゃないかという感じがしていて、もっと深みとか広がりを感じさせるのがやっぱり図書館ならではの仕組みというか役割だと思います。</p>
大串	<p>経験的にいうと、例えばこの地域にお店を開こうとなると、そのためのマーケティング資料はどこにあるのかと図書館で調べようとすると、やっぱりどちらかというところに行きつくところは、マーケティング・データバンク（日本能率協会総合研究所）にたどり着く。昔は図書館でよく使っていたのは、「キーワードインデックス年報」でしたが、今年の4月からそれはオンラインデータベースに移行しました。マーケティング・データベースの資料は、何かを始めようとするときに需要供給関係だとか、モノを作るところから売るところまで非常に良い資料がある。もちろんそこだけではなくて、モノによっては証券取引場が設置している資料室、それから証券図書館だとか、そういう所に行くとデジタル化された本とファイルに取ってある資料と両方あって、それをいろいろ見ていると「なるほど、こういうことか」と分かる。</p> <p>都内の場合は意外とそういう機関が沢山あって、図書館に相談された時、単に区の窓口を紹介するだけではなくて、専門の機関と契約することによって、そこに案内が出来、いろんな情報が手に入る。例えば、都立図書館がやっている</p>

	<p>のは非公開の情報機関でも都立図書館から紹介してもらおうと資料などを見せてもらえて相談に乗ってもらえる、そういうサービスを行っていた。図書館員がそれぞれ訪問してそれぞれに話を聞いて意向を聞き、「こういうケースはダメだ、こういうケースは紹介しない」と基準を作って、その範囲で紹介したのです。それは案内の仕方を適当にやるとトラブルの原因になるので、きちんと話を聞いて文書を作ってそれに基づいて紹介するというやり方でやっていた。都内にあるメリットがすごくある。そういうメリットをぜひ生かしていただいて、この地域の中でそういう関係機関が専門分野の情報を持っていることがあるので、そういったところも視野に入れて考えるといいと思います。図書館を窓口にしていろいろ調べて、また図書館が情報を取って、専門図書館の案内に繋げるというケースもある。図書館に来てみると深く分かる、そういうことを思っていた。</p> <p>事例として経験したものの中にマッチングがあります。例えば、アメリカからマッチングについて FAX で相談がきたことがある。自社がこういう新製品を開発した、これを製品として組み込んで新しい製品を作ってもらえる、そういう企業はないか、そういうのを売ってくれる日本の企業はないかというものでした。「日本の図書館では分からない」と他に回してしまったのですが。どうしてかというアメリカでは当時、トーマス・レジスタンスという製品別名鑑がある。それを見ていると、こういう製品はこういうふうに組み込めるというイメージがわく。アメリカのビジネス支援はマッチングあたりがかなり幅広く利用できるシステムを持っている。確かボストンに行ったときに見たのですが、相当そういう資料があったが、日本の場合はあまりこういうのがない。例えば市によってはマッチングのための人を4、5人雇って、街中周らせたりしている。この企業とこの企業を結び付けると、こんな製品ができるとか、こういう新しいことが作れるというようなことのために人の配置をしているところもある。マッチングについてはよろず支援拠点という所がやっている専門の機関ではないと難しいかなと思うのですが、そういった所に図書館が紹介をできるようにしておくことは必要だなと思います。</p> <p>図書館から情報発信をするといったお話では、メールでお知らせをすると。これは北広島の図書館がビジネス支援を始めたときに、登録した方に図書館が入手した情報をメールで送ることをやった。こういう SNS を使ったサービスはマーケティングデータバンクもやっている。積極的に図書館がやっていくことも必要だと思います。</p>
加藤	<p>宇陀先生からのお話と、大串先生からも冒頭で仰っていただいたのですが、今回の中野区のビジネス支援について、ビジネスというよりも生き方といいますか、ビジネスや創業の間口を広げて行くための施設にして行きたいということ</p>

	<p>も提案書に書かせていただいております。実際に中野区でそういった形やっている施設は現状ない中で、この事業を展開して行くにあたって、我々としてはポイントとなるもの、こういった点に気を付けていくべきなのかお話しいただけますでしょうか。</p>
<p>2.2 検討事項 (1) 新図書館のビジネス支援について</p> <p>①コンセプト</p> <p>②運営のポイント</p> <p>③フロアでのサービスについて</p>	
宇陀	<p>抽象化思考がすごく苦手な方が多いと感じていて、具体的な例を出すと分かりましたというけども、ちょっと抽象化するとついていけないところがある。若年層の考え方、例えばうちの学生を見ると受験勉強型の頭になりきっている。大学の勉強は自分で考えることだよ、とっていますが、相変わらず受験勉強ふうに勉強したがる。それ以外の講義の仕方や試験のやり方をすると、途端についていけない。学校と図書館とは一緒になっているところもあるので、学校のシステムとは別のインフォーマルラーニングというのも中野区の役割としてあっても良いのではないかと。学校を支援するというだけではなくて、それ以外の道筋もあるというのも良いのではないかと。僕が一番本当に理想でやりたいことは、価値観の破壊。いろんな所の情報が一方的に補填されることによって、同じような考え方とか同じような価値観が当たり前のようにになっている。それを破壊することも図書館の役割ではないか。若者の最近のイノベーション活動であったり、全く新しい考え方、ビジネスの仕方、人脈の作り方だとか、社会やテレビとかで見えているような社会とか世界のあり方と異なるあり方があるということを示したい。ただ、地域的すぎないのもよろしくないのかもしれない。学校の先生がこう教えているのに、それに対して「違うよ」と教えるのもそれは違うのかなという気がしないではないのだけれども、いろんな考え方があっても良いと僕は思うのですけども。</p>
大串	<p>学校教育でいろいろとやっている訳だから、その通りになぞって公共図書館はやる必要はない。図書館が地域の中で存在するのは、もっと違った世界がある、違った総合的な活動があるとう辺りを図書館の中で学ぶ。教育キットみたいな物を揃えて子どもや若い人たちにビジネスについても学んでもらって、新しい視点、新しい発想を見ていただけるというのも大きな役割だと思う。</p>
宇陀	<p>学生さんたちが具体的イメージ、具体的なことに引っ張られていることに対して、感銘を覚えることもあるので、それは一つのアプローチだと思う。モデルというか、生き方モデルの提示をパッと分かるモノがあると良いのではないかと。ダイレクトに世界にはこんな奴がいるんだよ、と。ロンドン、ニューヨーク、中野区みたいなね。中野区の向こう側にはニューヨークがあるんだよ、中野区</p>

	<p>の向こう側にはロンドンのぶいぶいいわせている若人がいるんだよ、君らと同じ年のがいるんだよ、ということを表すようなイベントとか、或いはそういう人たちの生き方モデルを描いた本を見せていくようなことがあっても良いのかなと思う。抽象的な部分それから具体的にダイレクトにイメージを与える。学生の Twitter とか見ている、「すごい、あいつ！」とかいうじゃないですか。あいつすごいな、と思うことに対して自分が共感して自分もやりたいというのは、一つの何かを知りたいとか行動に移す動機になる。そういう人物モデル、生き方モデルを見せるというのは良いと思う。</p>
永田	<p>今のお話は TED のようなプログラムが好例かもしれません。気づきっていうのか、来館者が「面白そうだな、こういう世界があるんだ」ということになれば良いですね。図書館にはプログラムっていうか、イベントが重要。</p>
大串	<p>社会全体として見た場合、人間が成長して社会の中でいろいろと物事に取り組んでいくということを提示することを考えていく。レポートの最初のところに IT グローバル時代の潮流とありますが、結局最近の研究を見ると、北欧の例だと、4歳～5歳は生涯にわたる学習意欲の基礎を作る時期である。この時期に良好な環境の下で学ぶ喜び、知る喜び、調べ見つける喜び、創る喜びなどを感じることができるようにすることが意欲を形成する上で必要。そういうふうに学ぶという意欲を持った子どもたちは長く学ぶという志向を持っている。大学院まで学んで、高度な知識、技術を身に着けることになると、地域に新しい企業、新しいモノづくりなんかが生まれてくる。またアイデアも。そういった時期にお金を子どもたちに投資するということは社会全体を一つにする。そういう人達が新しい労働力として社会に出て、新しい技術を開発して行くと新しいお金が回り込む、という社会の循環システムが出来上がってきて、社会全体が回っていく基礎となるという考え方が最近の研究で出てきた。小学校に行ってからだとそうした創造性の基礎を育むことはあまり出来ないという研究報告です。集団教育では十分でない。いずれにしろ、こういう起業っていうことを広い社会的な視野でみていくと、基礎的な部分をやっていかないと、いくらソフトを用意しても、結局それが一人ひとりの個人レベルで活かされていかない。血と肉になっていかない。中野区がどれくらいまで考えるかという話しになるのですが、そういった意味では幅の広い視野で考えて行くことが大切である。教育との兼ね合いでいえば、小学校2年の教科書で職業を採り上げている。「せいかつ 下」で。教育出版の教科書を見たのですが、仕事に関してこういう本がありますよ、と提示してあって、さらに関係の本を読むように勧めている。それ以外の教科書にはない。それから非常に良く本をいろんな形で単元に合わせて紹介している教科書は「光村図書」の国語でそれを見て行くと、小学校5年のところで人々がいかに生きるかということの教材があって、そこにいろん</p>

	<p>な生き方をした人達の伝記の紹介がある。手塚治虫であったり、アフリカで人権運動に取り組んだローザという女性の方だとか、杉原千畝とか、いろんな方の紹介が小学校5年で出てくる。小学校6年になると未来を創るということがあって、これからの仕事はどういう仕事があって自分が関心を持ったモノを見つけてみようという紹介がある。そうすると、こういった取り組みをする場合でも、そういったことも視野に入れながら子ども達、親御さんに働きかけをする。今のキャリア教育は小学校1年から始まっている。文科省のページを見ていただくと、1・2年、3・4年、5・6年というそれぞれの分け方で取り組みを紹介している。そういうのを見ると図書館でも積極的に取り組む。ここで提案されている中身はとても良いと思う。また、その場合きめ細かな視点を持って取り組むと非常に効果はあるのではないかと思います。運営のポイントの若年層を呼び込む仕掛け、子育て世代を呼び込む仕掛けは、例えば平成29年に行われた台東区の調査では、来館者のうち図書館に来て職員に調べ物や資料探しで相談してみたいという人は20代だと73.7%も居たが、ところが実際には図書館員に相談する人はほとんどいない。例えば40代だと69.5%の人が図書館員に聞いてみたいという意向を持っていたが、ところが実際にはほとんど相談しにくる人がいない。どうしてかという、図書館の仕組みとして聞けるシステムがない。日本の図書館のレファレンスのカウンターって大体奥の方にある。あんな所には誰も行かない。人が来ないからそこには人を配置しない、せいぜい土日に来る人をつけるということになっている。そういう図書館の仕組みを変えなくてはいけない。アメリカの図書館は入口のすぐ側にレファレンスのカウンターがあって人が待ち構えていて、何でも聞いてくださいという姿勢が示されている。日本の図書館でそういった図書館はないことはないが、先に触れた台東区の調査では職員に相談できると知っている人が77%。だけでも件数を見ると、そんな件数はない。これはビジネス支援においても、図書館に来て相談できることを周知することと同時に、来た人がすぐ図書館員に相談できるような場所と仕掛けを創らないと上手く行かないのではないかと思います。</p>
<p>宇陀</p>	<p>図書館のカウンターに座っている人達というか、カウンターが僕には壁に見える。それから座っている人たちが大抵怖い顔をしている。すごい壁のようなデスクがある。例えばワークショップをやるにしてもファシリテーターが机の周りを周ってくれる。ファミレスでも店員が通ってくると声をかけやすい。そんな向こう側にいるような人達に声をかけるのは難しい。全部が全部カウンターを辞めろというのではないですけども、もう少しレファレンス側の方が利用者の中に入っていきながらあっても良いのではないかと。そうしないと声かけられませんから。</p>
<p>大串</p>	<p>全くその通り。大学図書館では書架の間を周る人を配置するところがある。そ</p>

	<p>の方の話の聞いたら、本棚の間で皆いろいろ考える、本を見ながら考えている、そこに職員が行くと声をかけられる。いろいろと本棚の間で聞かれることが多い。それからカウンターで聞かれることと本棚で聞かれることは差がある。本棚で聞かれることは意外と自分たちの生活だとか、学習だとか身近なことを聞かれる。カウンターに行くと構えてしまう。</p>
永田	<p>ビジネス支援でも、予約制は有効。自分が予約した時間は聞いて良いというのは割と有効的。</p>
大串	<p>やっていらっしゃる所はあります。そのための人を配置している。</p>
永田	<p>特にビジネス支援のようなある種、専門的な支援サービスはそういった形が良いのでは。それとじっくり相談したい場合、大学生の研究支援なんかでも、とても有効だという。</p>
大串	<p>小山市では団体の方に来ていただいて、時間を決めて予約を取っていただいて相談できる。大田区立図書館の地区館ではそういった形でやっていると言ったこともあります。</p>
宇陀	<p>他には遠隔の相談みたいなのは考えていないのですか。今はスカイプみたいなモノが当たり前になってきて、若い人も普通にスカイプに慣れている人が多い。ビジネスって、ビジネスをやる現場でこそ相談に乗ってほしいな、とことがあると思う。「今これ見てよ、何かやろうとしているんだけど。」というところがあるのだけでも、それがないと相談するときの具体的なイメージが浮かばないということもあって、スカイプで映しながら相談できるようになると良いなと思う。</p>
大串	<p>実際にアメリカ辺りはやっていて良い事例もある。職員が大変だと聞いたことがある。あとは、今までの図書館で嫌がられることで挙げられるのは、区民ではない方が沢山聞いてくる。だから区民であることを認証してから相談しに来ていただくという考えもあるようですが、それもおかしな話で、例えば都立の相談窓口で私が担当していた時は1年間で十万件の相談があった。すべて都民であるわけではなくて、外国から（アフリカやニューヨークから）電話もあった。電話のカシャカシャといった音で外国からの電話だと分かる。1回目はしっかり応えるが、2回目は地元の図書館に問い合わせたいと伝える。自分がどこにいるかということに拘わらず、そういうサービスをしているといろんな所から相談がくる。それに対してもどんどん応えるという姿勢で、自治体の具体的な中身になったときに地元に行ってもらいと、そういう仕分け方をしないといけない。メールレファレンスは、居住地域で縛りをかけているところも見受けられるが、もっと間口を広げたほうが良い。</p> <p>最終的に相談をお受けする方に関しては、どんな方でも良い。社会全体の仕組みがそうなっているのだから、それは考えた方が良い。税金でやっているのだ</p>

	から区民だけのためにやるようない方はなかったと思います。
永田	新しい図書館のビジネス支援で留意する観点をいくつか指摘していただいていると思います。その辺りで、さらに強調していただく点があれば仰っていただきたい。宇陀さんの方ディテールを詰めないとダメだという話が出ていました。例えば NDC に囚われない並べ方は、今の公共図書館の常識でもあるのですが、実際それを実践する時どういう世界を描けば良いですか。実際に本を扱うとき自動的に NDC は付いていますからね。NDC を有効活用すれば良いというのはどういうことなのか。NDC を自分たちの概念に合わせてグルーピングして置けば良いという話なのか、そういう手法はありなのか、仰っていただきたい。その辺りの話を私どもは検討事項に含めて行きたいと考えています。
大串	NDC ではいろんな所に分類されているから、ビジネス支援に関する一つのテーマにしても、5 門にもあるし、6 門にもあるし、7 門にもある。そういうのを一つに集めることで、テーマについて調べやすくなる場所がある。 僕が図書館で勤務した時に指導されたのは、聞かれたら利用者さんと一緒に本棚に案内をしろ、と。そういった対応をするためには人が必要になる。だからそういった意味ではビジネスに関するものはいろんなテーマであるのだけでも、その範囲にもよるのですが、一つのテーマで見るのか、それとも一つの流れで見るのか、いろいろなことがあるのですが、その辺を考えて NDC の各所にあるものを集めてきて一つにする。そういったことは生活関係では図書館でおやりになっている所がありますよね。昭島市立は入口入って左側に生活関係の本がある。あれはいろんな所から集めてきて、生活に関する本をテーマで並べている。別に NDC の棚はある。それだと NDC の所定のところは間が全部抜けてしまうわけですが、それは本棚に表示があるので理解はできます。利用者さんから見るとそうしていただいた方がずっと使いやすい。それで大阪市立は大胆にも収集レベルからそういったことをおやりになっている。基本的にそうしていただいた方が現代社会にふさわしい図書館になると思う。
永田	それを間違えてはいけないのは、NDC はデータとして図書に入っているのです。だからそれを使わない手はない。それを適当に集めれば良いわけではない。そこは間違えてはいけない。そのまま使うのではなく、自分たちのイメージを持つということが重要。で、どんなイメージ（ジャンル別）が良いですかと伺いたい。
宇陀	その粒度だと思う。ざっくりとしたモノはどれを入れれば良いかっていうのもありますし、あまり細かくてもダメだから、その粒度を上手く十進分類のところで見えればよいかな、と思う。もう一つはストーリーですよ。こういうふうに見える、とそれぞれのテーマのストーリーがある程度細かい粒度で見えると良いと思います。ヒントになるのは近大のアカデミックシアター内の新図

	<p>書館ビブリオシアターという所で、あれは松岡正剛が企画・選書をしたもので、今までに類を見ない図書分類近大 INDEX に基づいて本を並べています。そこには、松岡正剛の世界観が見えているのですけども、それが「松岡正剛の世界観だよ」というふうに見せている所が一つ僕はポイントだと思っていて。中野区のビジネス支援における我々が見せたい世界はこうですよ、とはっきり見えるようなコンセプトが良いかなと思います。意外性とすぐに浮かぶコンセプト、「ビジネス支援ってこんななんだろうな」という話と、それから「あ！こんなものもあるんだ」という所が両方うまく具合、バランスで出てくるとどんどん見たくなるような気がする。全然関係ないモノがあると「関係ないや」と思うし、当たり前前のモノがあると「ああ…」って思うから、そのバランスをうまく NDC の組み替えによって見せられると良いと思う。そんなに難しくはない、と私は思っている。</p>
永田	<p>その辺りは、ディテールを詰めるという方向についていろいろご意見いただいた方が良い。もう一つは、我々がビジネス支援図書館を考えた場合は日本ではあまり良い実績をもつ所は少なく、結局住民に役立っていない。どうしたら役立つのか、そのストーリーをしっかりと書かなくてはいけない。ストーリーを書く中で割と難しいのは、情報をうまく結びつけることと情報の中身である。日本のビジネス支援図書館でつまらないのは、市販された本ばかり置いている。本当に必要なモノがない。例えばマーケティングの情報を見たいのにないのです。ディレクターがないなど。だからそういう辺りでどう解決していくのか。</p>
大串	<p>マーケティングデータバンクですと相談事例が出てきます。図書館では「ああいうモノはあそこにあるよな」とか思い浮かぶのだけでも、それは古い。もっと新しい情報を必要としている。そうするとやっぱり本ではなくて、新聞とか雑誌とか最近でいうと HP とか。きちっとした体系的というか、一つのマーケティングにおいても新しい情報があり、分析まで入れたようなモノ、調査レポート等も。例えば貿易関係で日本におけるこういうモノに対しての需要はどういう所にあるのか、貿易振興会で作ったレポートが外国向けに出ている。そういうのは図書館が気付いて利用者に案内できるようにならないといけないわけです。</p> <p>マーケティングデータバンクでもこういうのがありますよ、と利用者に紹介をして、利用者がそれを見て「それだったら、私も利用できる」という人が結構いる。それは関係する、どこかに所属されていてその所の所のある窓口に行くとそこに行けることができます、といったようなことが結構ある。そこで外国の企業向けのモノが実は日本でも当然役立つ。そういう普通の図書館では目に見えないようなところまでリサーチしていろんな資料を紹介する、というようなことがビジネス支援の図書館では求められている。</p>

	<p>新聞の記事だとか日経テレコン 21 を見ても、専門の新聞のデータは検索できるようになるまで時間がかかる。タイムラグが出てしまう。専門関係の新聞は図書館で揃えて置いた方が良い。オンラインデータベースがあれば良いのですが。やっぱり業界紙だとか業界の雑誌はある程度揃えておかないとサービス出来ない。雑誌、新聞のタイトルは揃えて、国の機関もあるし民間企業もあるのだけでも、そういったリンク集を作って横断的に検索ができるようなシステムを作っておかないと迅速に対応できない。企業と地元の情報を絡む必要がある。いろんな広報機関が作ったモノを纏めて何十万で売るといふもある。そこまで図書館が手を伸ばさなくても良い。</p>
宇陀	<p>少なくとも見た方が良いのは、オープンデータの流れです。あれが今後どういうふうに進んでいくのかは分からないのですが、行政の方でもオープンデータ化する所が出てきている。海外だとデータをオープンにしようと流れがあるので、データをしっかり集約して、そこへのリンク集を整備していくのが良い。刻一刻とオープンデータの世界と変わっていくと思うので、ご注意いただきたい。</p>
大串	<p>オープンデータに関しては、ここの新しい図書館ではそういったことを知っていて、こういうのがありますよ、とお伝えすれば良いだろうと思っています。だが、日本の現状はオープンデータが上手く行っていない。とはいえ、情報が電子化され、それが有料化されている状況にあって、オープンデータの展開は、上手く活用できるか、今後検討する必要があります。</p>
大串	<p>区の方々の考えているご意見はありますか。</p>
伊東	<p>今日の議題はビジネス支援ということで、専門が子育ての担当なのですが、ハード的な部分で質問なのですが。先ほどの先行事例の中で比較的建物が低層ですよ。比較的小さいお子さんや子どもを連れてお母さんだとか、入りやすいかと思うのですが。今回、中野区の図書館は上の方 7 階になるのですが、導線はどうなるのでしょうか。小さいお子さんは入りやすいのかなと。</p>
大串	<p>沼田市立図書館はビルの中でもたしか 3 階に児童室があったと思います。入るとエレベーターがある。あそこは斜面地にあるので建物的に柱になっている。エレベーターで上がるようになっている。入口の所でうまくコントロールすれば全然問題ない。乳母車を乗せるときは、最近の乳母車は大きいので、箱の造りに気を付けていただく必要がある。少し奥行きのある大きめの箱を備えていただくとあまり問題はないと思う。どうやって行っていただくかは上手くコントロールすれば問題ない。</p>
永田	<p>子育て支援サービスとビジネス支援サービスの関係と、ビジネス支援の提案の中で子供たちが将来どういうふうに進路について感じてもらうのはプログラムからでしたか。</p>

大串	子育ての対象は何歳からですか？
永田	ずっと、です。小学生も中学生も入る。
梶川	私は千代田図書館にいたのですが、あそこは10階に子育て支援サービスがあり、子ども一人では来られない。親子で来てイベントをやったあと、保護者の方との交流をする意味合いをもった施設でした。この計画では開放型学校図書館がありますので、割と身近な所でお子さんたちが図書館に親しむのは、そういった形が良いのではないかと、思います。高層階の方は親御さん達で来る形で、低層階だとお子さんだけで来やすいと思う。
大串	<p>小さいお子さんが図書館にくることにに関して過去に調査した例があります。記憶によると、小さな子供は200m、中学生は400m圏内。そうすると日本の図書館で欠けている課題点とすると、今回中野区さんが提案されているように、地域の中でできるだけいろんな所に沢山子どもたちが本を読める空間とか本に接する所、読み聞かせをするような空間を沢山造った方が子どもの読書といった点ではいい。むしろ造らないといけない訳です。ところが図書館があれば良い、という考え方がある。今回提案されている、学校をそういった場にするとといったようなことは、とても素晴らしいと思う。図書館で上の階に来る子どもというのは、小学校4、5年の子ども達がグループで来る形になると思う。それ以外は親御さんと一緒に来る。多分、地元の利用者さんからもエレベーターで小学校2年ぐらいの子どもを一人で行かせられないという話しは当然ある。その辺は自然と落ち着いてくると思う。ただ、そこで一つ問題なのは、子どもさんを連れてお母さんやお父さんと一緒に来ていただく、そういった仕組みを図書館がどうやって作って、図書館の空間の中にもどうやって作っていただけるかということでしょう。子どもは騒ぐ訳。大体日本の図書館の悪い所は、真ん中のあたりに新聞、雑誌を置いて、その横に児童室があるという所が多い。子どもが騒ぐと、真ん中まで声がいってうるさくて怒られて、子どもは図書館に来なくなる。私の娘もそうだった。そういう仕組みは最悪。子どもたちが安心して図書館に居られて、お母さん、お父さん方と一緒に過ごせるような空間にしていくように、建築的に必要なこと。</p> <p>700平米の図書館を作る時に、委員会の座長をやったことがあるのですが、子どもは騒ぐから子どもの部屋はガラス張りの見える部屋にした。音が外に漏れないようにもした。そういう空間を小さな図書館だから17時、18時以降は大人も使えるようにする、といった意見が住民からあった。保健所に行き、子ども達の空間を夜に大人達が使えるようにしたらどうか、と聞いたところ、「やめてください。」といわれた。「感染症の問題がある。大人の感染症が子どもにうつたらダメなので、それは止めてください。それは子ども達の空間だけにしてください。」といったような話をしたことがあります。</p>

加藤	今度の新図書館は7階, 8階, 9階のフロアが図書館になります。7階が子育て支援としてエリア分けは出来ている。高層階という所では江東の豊洲図書館も高層階になります。あとは, 豊島の中央図書館, エレベーターが搭載されていて, 事例というのは他にも沢山あります。
大串	日本橋の学校併設の図書館も上にある。5, 6階は図書館で下は児童のフロア, 上は大人のフロアと分かれている。全然問題はない。
伊東	身近にそういう事例がなかったので心配でしたが, 導線がしっかりしていれば問題ないですね。
2.2 検討事項 (2) 新図書館の一般向けサービス及び参考・地域サービスについて	
①コンセプト	
②運営のポイント	
③フロアでのサービス	
④併設機関・サービスを考慮した運営	
大串	よく読ませていただきましたが, 提案書はよく考えられている。いくらガイドラインがあるのか。こういうのがサービスとして実現すれば素晴らしいと思う。
宇陀	私がこれを読んだ時の印象は, 活動の場として機能させる意思はありありとして見える。いろんなイベントの例がすごく出ていますけれども, これだけのイベントを逆に本当にやるのか。心配になりました。一つひとつのイベント計画も大変だと思う。イベントは一過性のイベントと継続すべきイベント, イベントの頻度も整理した方が良いのでは。頻度が高く継続してやるイベントと, 数カ月に一度お祭りに客寄せ的なイベント, 物理的な配置も絡んでくるのでそこも整理すると良いと思いました。
永田	図書館は今後, イベントはやらなきゃいけない, 大変ですが。
宇陀	全部やれたらすごいですよ。常にマイナーチェンジをして新しさを見せて行く。
大串	あまり難しいことではない。日本の図書館で何が悪いかというと, 住民との兼ね合いで図書館だけで, という世界を作りがちなのですが。積極的に住民の方との関係性を作っていく, 関連を積極的に作っていくと地域の方々は図書館に来て人と人とのつながりを作り, 交流をし, 自分の人生の中で自己熟成をして行く。それぞれの時期に図書館と関わることによって, 人間的に成長していく。図書館というのは, 地域の方々に人間的に本や情報を図書館で得て成長していただける場だと僕は思う。その成長の中で単に自己実現ではなくて地域の中でみんなと一緒にやりながら, いろんなことを実現していく。そういった中から図書館で何かやりたい, と声が出てくる。例えば日常的にボランティアの方々にコンピューターの使い方とか検索の仕方を来館者に案内をしている所もありますし, もっと積極的に関係をつくることによって, イベントも住民の方々がやることもある。あともう一つは企業からお金を出していただいてイベント

	<p>をやると。そういった工夫の仕方によって地域との関係の作り方ってできるのです。だけどそれを今まで日本の図書館はやって来なかった。どこかの図書館の方がイベントをやる必要はないとまで書かれている、そんなことよりは資料の提供の方が重要だと。僕は講演会でそういった方達と一緒する時に仰っているのを聞いたことがあります。基本的に、それは違うと思うのです。</p> <p>「住民の方の図書館」だと基本的にはあるので、住民の方が「自分の図書館だ」と感じていただければ、積極的に図書館に関わっていただける。自分達の図書館であるという気持ちを持っていけば、なるのです。積極的に地域の人的資源を掘り起こして、例えば地域の歴史をそういう人達が喋るようにすると。地域の街歩きをしましょうという会でもそういう人達がグループを作ってやっている。</p> <p>タブレットで電子書籍を読んでみよう、とか電子書籍を作ってみようというのものもある。レポートをまとめてデジタルな形でネットにアップして皆でやるとか。企業の商品の宣伝をネットにアップして皆で批評し合うとか。絵本をデジタルで作って、デジタル絵本をネットにアップして皆で評価しあおうというのは高校の課題でもあるので、高校の先生一人来てもらってやれば、お金のかかる話ではない。</p>
永田	<p>だからこそ、高校生が来るようになると思います、自分の課題だから。そして、そういうことをやっちゃいけないという理由にはならない。</p>
大串	<p>世田谷区でやったときは図書館の入口にオープンスペースを作ってそこでは、お茶も飲んで良いし、ネットを繋ぎながらお喋りができる場所を作ろうと案はあったが実現できなかった。ビジネス支援においては、商店街の地図を作って扱っている商品やサービスを検索できるシステムを作ろうという話しをしていまして、商店街の委員も大いにやろう、となったが、結局行政側がビビってしまって実現できなかったこともあります。そういう時代でもないと思うので、積極的にいろいろできると思います。</p> <p>今日のまとめとして、検討事項でそれぞれのご報告をいただいて、それに対しての質問事項があって、レポートに沿ってお話をしました。特にビジネス支援のことで具体的な提案もあってお話しさせていただいた。提案にあるような、間口を広げて考えるということが良いのではないかと。今までにないような新しい視点で取り組んでいくという提案があった。</p>
宇陀	<p>提案書に書いてあることは不可能ではないと思う。</p>
永田	<p>大雑把にあって、課題が二つあって今回は一つのことを検討していただいた。もう一つは次回の検討会議で話し合ってくださいということになります。</p> <p>中野区の新しい図書館はビジネス支援と子育て支援にかなり特化した図書館になります。それと一般的なサービスもある。住民の中には特徴ある図書館より</p>

	<p>一般的な図書館が欲しい人がいないのではない。この辺で留意すべき点があったら教えていただきたい。特徴ある図書館を造ることに対して「行けるのではないか」と思うようになりました。</p>
大串	<p>区立の図書館の場合は区の図書館それぞれのネットワークを作って、資料の巡回が出来て貸し借りをしている。積極的に図書館側が本を見せる、本の情報を住民の方々にお届けをして、いかに目の前にある本だけではなくて中野区全体にある本を活用していただく、こういった視点で取り組んでいただければ何の問題もないと思う。大人が本を手にするきっかけとは、第一番目は新聞やテレビで話題になったというもの、二つ目は図書館や書店で表紙を見て「これ面白そう」と、三つ目は本の書名を見て面白そうと思う、この三つです。ほったらかしにして貸出数が落ちている日本の図書館は二番目と三番目をやっていない。熊本の駅前図書館は熱心に行っている。それぞれの分野の棚で表紙を見せるテーマ展示をして二週間に一度テーマを変える。そうすると、来ると新しい本が見られるということで利用者が繰り返してくる。しかし他の図書館はやっていないから、いつもベストセラー本ばかりが借りられている。ベストセラー本の予約ばかりになっている。そういう利用者に固定されてきて、日本全体の図書館の貸出数が減ってきている。それに蔵書が偏ってきている。ある区の図書館の蔵書は文学書が40%で、これは良くない。日本の新刊書の中で文学書は17%位。中野区は一つのタイトルは3冊まで副本を買うようになっているようですが、ある区では10冊。図書館は多様な本を揃えて、住民の方々に見ていただく、手に取っていただく。イベントをするにしろ、映画会をするにしろ本を手にとっていただくためにやるというのが図書館の特徴なのではないか。例えばある区立図書館で、子どもさん向けの映画会をやるときに、図書館内に案内のポスター貼り出しているのを見たのですが、それだけで何の本の紹介もない。本棚を見ればそれに関わる本は何冊もある。ポスターの下に本を展示して手に取っていただけるような努力を日常的にしないといけない。予約やリクエストの本のほとんどが新聞とかでベストセラーになった本が圧倒的。その辺を注意して運営していただければ良いのではと思います。</p>
3. 次回の検討委員会について	
佐伯	<p>次回の日程確認をして本日は終了したいと思います。 次回は7月20日（金）第二回検討委員会を行いたいと思います。</p>
宇陀	<p>7月は水曜日と金曜日が厳しい。時間は何時からですか。</p>
佐伯	<p>15時からです。次回は子育て支援の議論になっていきますので、ご調整させていただければと思っております。本日は産業振興センターでの開催でしたが、次回以降は場所も追って連絡させていただきます。</p>